西洋中世学会第 15 回大会 (2023 年) ポスター報告要旨

1. 太田原 建 OTAHARA Ken （東京外国語大学大学院）

ザーリア朝後期ザクセンにおける諸侯の権勢戦略（マハトポリティーク）
—ロタール・フォン・ズュップリンゲンブルクのザクセン大公推戴—

Machtpolitik of the Saxonian Nobles in the Late Salian Period:
The Elevation of Lothar of Süpplingenburg to the Duke of Saxony

12 世紀の皇帝ロタール 3 世・フォン・ズュップリンゲンブルク（1075 年生－1137 年没）は、王家の血統に属さないながらも、伯という地位からザクセン大公を経て国王、皇帝の地位へと登り詰めた稀有な人物である。このロタールの地位上昇プロセスのうち、本発表ではザクセン大公推戴（1106 年）という出来事を取り上げる。その際、当時のザクセン諸侯、特に従来の研究においてほとんど顧みられてこなかった前任の大公マグヌス・ビッルンクが繰り広げた諸戦略を軸に、ロタールが大公に推戴された理由を考察する。

2. 小林 亜沙美 KOBAYASHI Asami （就実大学人文科学部総合歴史学科）

12－13 世紀の教皇尚書院における文書作成工程

Issuance of documents at the Papal Chancery in the 12th and 13th centuries

広く長いヨーロッパ中世に、さまざまな種類の文書が作られ、そのごく一部が現代まで伝来している。そしてそこから私たちは過去を垣間見ることができる。では、いったいどのようにして文書は作成されたのだろうか？その工程は時代や地域、文書差出人によって異なる。本ポスター発表では、主に 12—13 世紀にローマ教皇の名の下に作成された文書、特に書簡の作成過程を図解し、文書原本に残された尚書院官吏のサイン等の解説を行う。文書差出人（ここでは教皇）の意図がどれほど文書に組み込まれていたのか、という点も明らかにしたい。

3. 永山 ことは NAGAYAMA Kotoha （東京藝術大学大学院）

ラヴェンナ正教徒洗礼堂 —スタッコ人物像の様式分析—

The Orthodox Baptistery in Ravenna: A Stylistic Analysis of the Stucco Figures

古代末期の聖堂内部装飾には、モザイクや大理石化粧板、スタッコ（化粧漆喰）が用いられた。ラヴェンナの正教徒洗礼堂（458 年頃改装）では、キリスト教的主題や預言者、動物がスタッコで表されている。異なる複数の様式が観察される 16 人の預言者像について、先行研究においては少なくとも 2 人の親方の存在が推測されていた。ラヴェンナの聖堂装飾の制作状況を探る足掛かりとして、様式的特性をめぐる議論を再考する。

4. 北舘 佳史 KITADATE Yoshifumi （中央大学）

地域の記憶から修道会の記憶へ：『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』の比較検討

From Local Memory to the Order’s Memory: A Comparative Study of Versions of Vita Stephani.

12 世紀に隠修士の共同体の多くが改革修道制に吸収されたように、オバジーヌの共同体も 1147 年にシトー会に加入し、時間をかけて修道会の慣習に適応した。隠修士の師であり、初代院長であるエティエンヌの最初の伝記と後の伝記では語られる内容に違いがある。オバジーヌで作成された最初の伝記が後におそらく列聖を意識して書き換えられ、さらにシトーの聖人伝集に収録されるように修正されたのである。本報告では聖人伝の諸版の比較を通じてどのようにオバジーヌのローカルな聖人の記憶がシトー会の聖人の記憶へと変容したのかを探りたい。

5. 工藤 義信 KUDO Yoshinobu （石川県立看護大学）

報告者の体調不良のため、本報告は取り下げられました

ピーター・イドリー作『息子への教え』と 15 世紀イングランド地主階級の書簡集

Peter Idley's Instructions to his Son and Letters of the Fifteenth-Century English Landholding Classes

中世後期成立の英語による物語作品の解釈研究において、登場人物の行動評価のために、作品と想定読者の社会階層が重なり合う行動指南書の教えを引き合いに出すアプローチが定着している。一方、そうした行動指南書の内容自体がいかに当時の人々の実践と結びついていたかは、未だ十分に検討されていない。本報告は、15 世紀中葉成立のピーター・イドリー作『息子への教え』が説く個別の教訓と、15 世紀の書簡集から得られる地主階級の実践のディスコースとを照らし合わせ、両者の具体的な関係性を検討する現在進行中の研究について紹介する。

6. 嶋﨑 礼 SHIMAZAKI Aya （九州大学）

16 世紀フランスのゴシック教会堂におけるトリフォリウムのトレーサリーの石積み

Construction of the tracery of the triforium in the 16th century churches in France

15・16 世紀フランスの教会堂建築ではフランボワイヤン様式のトレーサリー（tracery, 一般に窓の桟として用いられる網目状の石組み）が発達した。従来、トレーサリーはその幾何学的な造形原理の観点から分析されることが多かった。しかし、トリフォリウム（triforium, 壁体内に作られる通路の一種）に適用されたトレーサリーを観察すると、デザインだけでなく石積みにも変化が生じたことがわかる。本発表では、エヴルー、アルジャンタン、トゥールの各聖堂にて発表者が行った最新の調査成果を紹介する。

7. 土佐 真理子 TOSA Mariko （立命館大学大学院）

中世初期アイルランドと外部世界との繋がり：「ハイ・クロス」の起源を巡って

Origin of the High Cross: Relationship between the Early Medieval Ireland and the Outside World

中世初期のアイルランド島では独自のキリスト教慣行が発展し、ブリテン島や大陸ヨーロッパに影響を与えていた。7-12 世紀にかけては、この島で十字に円環が重ねられた特異な形態の石造十字架「ハイ・クロス」が発展した。本報告では、ハイ・クロスの誕生と発展過程について、現時点での調査結果を示す。聖人伝などの文字資料におけるアイルランド内部の歴史的背景、キリスト教布教活動の状況、自然現象の影響などについて分析を進めた。それに加え、外部世界との交流や関係性にも視野を広げることで新たな展望が得られるのではないだろうか。

8. 福岡 里桜 FUKUOKA Rio （慶應義塾大学大学院）

報告者の体調不良のため、本報告は取り下げられました

中英語文学における交換される人身：中英語ロマンス作品 Sir Amadace を中心に

Human Trafficking in Middle English Literature: The Ritual Killing in Sir Amadace

14 世紀後半の中英語ロマンス作品 Sir Amadace の終結部において、主人公であるアマダス卿が白い騎士から贈られた物品に対する代償として妻を差し出す場面はアブラハムが信仰心を示すための生贄として息子を神に差し出す場面に似ているとしばしば指摘される。本発表ではこれら二つの場面を贈与論を援用しながら分析することで両者の相違点を明らかにし、人間を商品とする交換行為が Sir Amadace には観察されることを指摘する。同時に、贈与論における返礼としての代償品の価値について再検討する。

9. 弓岡 弘樹 YUMIOKA Hiroki （東京大学大学院）

14 世紀イングランドの都市-大学関係における調停者としての王権

On the role of Crown as an arbitrator in Town-Gown relations in fourteenth-century England

本報告のテーマは、14 世紀イングランドにおける都市・大学・王権の関係である。特に、制度と人的要素の二つの観点から三者関係を解明する研究の一環として、オックスフォードとケンブリッジを対象として相互に比較しつつ、都市大学間の調停者としての王権の働きに注目する。本報告では、最初に、当該テーマに関する先行研究を概観した上で今後の研究計画を示す。次に、具体的な史料分析事例として証書などの国王文書を用い、国王が周囲の人々とともに調停に関する意思決定を行う際、その意思決定に大学の人材をいかに用いたかを考察する。

10. 福田 智美 FUKUDA Tomomi （東北大学大学院）

エリザベス 1 世期における枢密顧問官の出席状況とその背景

Why did the Elizabethan Councilors Attend the Privy Council ?

エリザベス 1 世期の枢密院については、マキャフリーによる派閥抗争を主題とした研究やメアーズによる助言を中心とした研究など多く研究の蓄積がある。エリザベス期の枢密顧問官の枢密院への出席状況は、平均出席率 34%程度、平均出席人数 39%であり、出席する者はけっして多くなかった。また、出席する者は比較的固定していたが、出席していない者はいなかった。本発表では、なぜ枢密顧問官は会議に出席していたのか、または出席しなかったのかを考える一助として、出席状況の極端な者に着目して、その経歴や出席の特徴を分析し、枢密顧問官の出席の背景にあったものを考えたい。

11. 井上 果歩 INOUE Kaho （サウサンプトン大学／東京藝術大学）

譜例における音楽理論家と筆写者の齟齬：

フランコ『計量音楽技法』（1280 年頃）を通して

Disagreement on Notational Examples between Authors and Scribes:

Franco of Cologne, 'Ars cantus mensurabilis' (c. 1280)

音楽理論書において譜例は、テクストだけでは説明が難しい音程や旋律、音符の形状や音の長さを例示する上で重要な役割を持つ。一方で、多くの音楽理論書で譜例の部分が空白になっていたり、著者の意図と異なる譜例が書かれていたりと、テクストとの連続性を考える際に譜例をどう扱うかがしばしば問題になってくる。本ポスター発表では、ケルンのフランコ『計量音楽技法』（1280 年頃）を例に、その現存する写本のほとんどにおいて譜例がフランコの説明と相違することに注目し、その相違がどのような経緯で生じたのかを考察する。

12. 東中 巴奈 HIGASHINAKA Hana （慶應義塾大学大学院）

ジェフリー・チョーサーの作品における光学論の影響：

『貿易商人の話』と『粉屋の話』の視覚認知表現の分析

Chaucer’s Perspectiva: An Optical Exploration of the Merchant’s Tale and the Miller’s Tale

本研究は、14 世紀イングランドの詩人ジェフリー・チョーサーの『貿易商人の話』と『粉屋の話』を題材とし、13 世紀に普及した Perspectiva という光学論に基づいて、「見る」という行為を分析する。まず、Perspectiva とチョーサーの 2 作品に共通して登場するファンタジー、鏡、光、白と黒や光と闇という二項対立への言及を比較することで、本研究は両テキストの記述の類似性を明らかする。さらに、テキスト間の類似性に基づいて、『貿易商人の話』と『粉屋の話』に描写される「見る」という行為を光学的に解釈する。

13. 加藤 政夫 KATO Masao （学習院高等科）

高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—：事例⑫「資料と史料の扱い」

European Medieval History in High School History Education:Resources and Historical Sources

昨年４月より高校でスタートした「歴史総合」という新科目では、「課題（問い）の追究を促す資料の活用」が求められている。「歴史総合」で学習する時代は主に「近現代」とされているが、このような「資料の活用」は「中世」を学習する場合にも可能なのか、さらにそれは「史料の活用」というかたちでも可能なのかを検討したい。